

療育者の困難感に関する研究

— 「子どもの療育をする上で困難に感じていること」 への自由記述回答からの分析 —

横畑 泰希・板川 知央

Research on the Difficulty of Experts in Child Development Support

Taiki Yokohata and Tomohiro Itagawa

要 旨

児童発達支援に従事する療育者に対して行なった自由記述調査を KJ 法に基づき分析した。療育者は日々の療育で子どもと関わる中で、【子どもとの関わりに対して困っていること】、【療育の実施で困っていること・悩んでいること】、【保護者に対して困っていること】などの現実的問題、【専門性の不足】や【療育者を取り巻く環境の問題】といった中核的問題についても直面する。また、療育上の困難感を【自分問題】として置き換えたり、【哲学的悩み】をも抱えたりすることが明らかになった。これらを構造的にとらえると、三層構造（表層・中間層・深層）として考えられた。第一層の表層はより現実的な困難感の心性、第二層の中間層は第一層を突き詰めていくと意識される心性、第三層の深層は療育者としての基底となる心性となることが考察された。療育者の困難感とはそれぞれの困難感を複合的に抱えた総体であること、療育者の困難感の本態は「混乱」の心性であることを論じた。

キーワード：療育者、困難感、混乱、児童発達支援

1. 問題の所在

療育とは、治療と教育という二つの意味を併せ持つ概念として、1960年代ごろより徐々に社会に認知されるようになってきた。加藤（2018）によれば、初期の療育は、「主に、保健所での乳児健診や幼児健診で問題が発見された子どもが知的障害児通園施設などに行政措置をされ、訓練に通うこと」としてとらえられていた。現在においても、「発達障害児に対して提供される支援を療育」（八木、2018）ととらえるのが一般的となっている。こうした療育の実施で中心となるのが児童発達

支援であるが、これには公的な運営による児童発達支援センター、民間の運営による児童発達支援事業所とがある。近年、こうした児童発達支援を行なう事業所が拡充され、その役割や期待も大きくなってきている。例えば事業所数で見れば、平成24年に約1,700ヶ所だったものが、平成28年には4,500ヶ所に達し、この4年間で2.7倍にまで急増している。また、平成30年に行なわれた障害福祉サービス等報酬改定において、より重い障害のある児童への支援、手厚い職員体制の実施などに対して、報酬が増加算されることとなった。こうした動向は、児童発達支援への社会の

ニーズの高さ、期待値の表れであると同時に、量的拡大と質の確保を同時に図ることが重視されていると考えられよう。

ところで、第一筆者はスーパーバイザーとして療育現場と関わり、現場のスタッフや管理者、運営者とも話をさせていただく機会が多くある。そこでよく話題となるのが、「職員が足りずに困る」「長く続かない人が多い」「採用をかけてもなかなか集まらない」といった課題である。児童発達支援に対する社会的なニーズもさらに高まり、地域の事業所も急速に拡充される中、職員の定着率をいかに高めていくのかは大きな課題の一つでもあることは間違いない。また、このような職員離職率の高さ等の課題は、福祉分野全体にとっても最重要課題であることは周知のとおりである。厚生労働省（2013）の報告によれば、全産業の平均離職率が14.4%であるのに対し、福祉分野の離職率は16.3%であり、福祉分野が1.9%上回っている。とくに男性職員の離職率では、全産業が12.3%に対し、福祉分野では17.6%となり、その差は5.3%と拡大している。

では、福祉分野の職員が離職に至る要因は何か。黒沢・佐藤（2017）は、介護職員が継続・離職意向を示す要因として、人間関係・労働条件・職務内容・賃金・休暇などで構成される「個別職務満足感」と、住居環境・友人つきあい・地域生活・家族関係・余暇時間などで構成される「個別生活満足感」の2つを指摘している。また、古川（2010）は、介護職員の離職率の高さの要因として、介護福祉士として働くことに対する本人の認識不足、専門性を感じられないことや職場内でのコミュニケーション不足、揺れ動く気持ちをサポートする体制の不備を挙げている。保正・杉山・楯木・大口（2019）は、医療ソーシャルワーカーの離職意向に及ぼす要因として、上司の配慮、部署環境、職員尊重の組織運営、ワークエンゲージメント、多様で標準化困難な業務を指摘している。

このように、離職に至る要因は様々であり、こ

うした要因が因果的にではなく、輻輳的に絡んでいることは想像に難くない。このことは、同じ福祉分野である児童発達支援の従事者、すなわち療育者でも同様のことが言えると考えられよう。しかし、療育者に焦点を当てた離職要因に関する研究はもとより、療育者がどのような悩みや困りごと、すなわちどのような困難感を抱えているのかに関する研究は見当たらない。

そこで本研究では、療育者が抱える困難感について、療育者からの声を収集、分析し、できるだけ多面的、構造的な示唆を得ることを目的とする。

2. 方法

(1) 対象

児童発達支援事業所1法人および多機能型事業所（児童発達支援+放課後等デイサービス）2法人に調査協力を依頼し、療育に主に携わっている職員を対象とした。

(2) 調査方法

Google フォームにて作成したアンケートに対し、同フォーム上にて回答を求める形式とした。アンケートは、選択式で回答を求める基本項目と、自由記述式で回答を求める項目とで構成された。自由記述を採用したのは、現場の療育者の生の声をできる限り掬い、その多岐にわたるであろう声を分析していくことで、療育者の困難感を明らかにする糸口になると考えたためである。

前者の基本項目は、「性別」・「年代」・「（勤務先の）事業所の種別」・「主として携わっている療育の形態」・「療育の経験年数（通算）」・「保有資格」の6項目であった。後者の自由記述項目では、日々の療育を実施する中で感じる困難について尋ねた。具体的には次のA～Fの6項目である。

- A：子どもの療育をする上で困難に感じていること
- B：保護者と関わる中で困難に感じていること
- C：外部機関と関わる中で困難に感じていること

- D：事務に関することで困難に感じていること
- E：同僚職員と関わる中で困難に感じていること
- F：その他困難に感じていること

なお本論では、上記 A～F の 6 項目のうち、A の「子どもの療育をする上で困難に感じていること」についてのみ分析結果の提示、および考察を行なうこととする。

(3) 調査期間

2018 年 7 月～8 月までの 1 ヶ月間とした。

(4) 分析方法

先述したように本研究では、療育者がどのような困難を抱えているのかを明らかにすることを目的としているため、自由記述によりデータを収集する方法を採用した。今回の調査は本研究の基礎的段階であり、得られた質的データを仮説生成的、仮構的に分析を試みる段階である。このようなことから、本調査の分析方法として川喜田二郎による KJ 法の手法を用い、以下の手順で分析を行なうこととした。

- ① 自由記述データについてラベル化を行なった。まず第二筆者が主となり、1 枚のラベルに一つの「困難感」となるようラベルを作成した。次に、第一筆者と第二筆者と合同で、不適切な文章のラベル、二つの意味が含まれるラベル等について検証した。
- ② ①で作成したラベルを使用し、意味の類似性を基準としてグループ化し表札をつけた(小グループ)。次いで、その表札やラベルの類似性を検討し、中グループおよび大グループ化を試み、それぞれで表札を名付けた。こ筆者二名が異なる意味の取り方をしたり、異なる類似性を主張したりした場合は、本研究の目的である「多面的」という視点に則り、まとまりとはせず独立したグループとして扱うこととした。
- ③ 最終的な大グループの関係性を鑑みた空間

配置を行ない図解化を行なった。図解化にあたっては、本研究の目的である「構造的」という視点を重視した。すなわち、平面配置図ではなく立体(空間)配置図としたイメージを共有し、筆者二人が常に確認しながらプロセスを進めた。

- ④ ①～③の作業を、すべての項目で繰り返し行なった。

(5) 倫理的配慮

本研究は、東京未来大学研究倫理・不正防止委員会による研究倫理審査の承認を受けて行なった。各事業所への調査依頼に際し、同承認を受けていること等を説明し承認を得た。なお調査に際して、当該 Google フォームのトップページにおいて、研究内容について説明を行なうとともに、個人が特定される恐れはないこと、回答はあくまで任意であること等のインフォームドコンセントを行ない、アンケートへの回答をもって研究への同意とする旨を記載した。

3. 結果

(1) 対象者の属性

調査協力を依頼した 3 つの法人より、150 名の職員による有効回答が得られた。

- ① 性別は、男性が 49 名 (32.6%)、女性が 101 名 (67.4%) であった。
- ② 年代は、20 代が最多で 46 名 (30.7%)、次いで 30 代が 43 名 (28.7%)、40 代 42 名 (28.0%)、50 代 17 名 (11.3%)、60 代 2 名 (1.3%) であった。
- ③ 勤務している事業所の種別では、「児童発達支援事業」のみ運営している事業所職員は 6 名 (4.0%)、児童発達支援と放課後等デイサービスを併せて運営している「多機能型事業」が 144 名 (96.0%) であった。
- ④ 主として携わっている療育の形態では、「個別療育」が 106 名 (70.7%) と最も多く、ついで「個別・集団ともに」が 36 名

(24.0%)、「集団療育」が2名(1.3%)、無記入が6名(4.0%)であった。

- ⑤ 療育の経験年数(通算)では、「1年未満」が48名(32.0%)、「1年以上5年未満」が82名(54.7%)、「5年以上10年未満」が11名(7.3%)、「10年以上」が9名(6.0%)であった。
- ⑥ 保有資格については複数回答可で回答を求めた。その結果を表1に示す。表1に示したとおり、特別支援等を中心とした教員免許保持者が67名と最多であり、保育士や幼稚園教諭などの保育者が続く結果となった。

表1 対象者の保有資格(複数回答可)

教員免許(特別支援等)	67名(44.7%)
保育士	33名(22.7%)
その他(※)	25名(16.7%)
幼稚園教諭	22名(14.7%)
介護福祉士	21名(14.0%)
保有資格なし	18名(12.0%)
社会福祉士	9名(6.0%)
精神保健福祉士	6名(4.0%)
看護師	3名(2.0%)
臨床心理士	2名(1.3%)
言語聴覚士	2名(1.3%)

(※) 児童指導員・認定心理士・社会福祉主事など

(2) 自由記述調査の分析結果～子どもの療育をする上で困難に感じていること～

本調査では、日々の療育にあたる中での困難感について6項目を提示し、それぞれについて自由記述式で回答を得た。先述したように、ここではその6項目のうち「子どもの療育をする上で困難に感じていること」の項目のみ結果を提示し、考察を論じていくこととする。

「子どもの療育をする上で困難に感じていること」に対する自由記述回答をラベル化したところ、212枚のラベルが作成された。その212枚の

ラベルについて意味内容の共通性に基づき分類した結果を表2に示す。表2に示したように、212枚のラベルを分類し43の小グループが抽出された。その小グループについて同様に分類した結果、16の中グループが抽出された。さらに同様の手続きを経て、7の大グループが抽出された。これらのグループに属したラベル数は204枚であり、残り8枚は分類不能と判断された。

次に、各大グループの構成について分析結果の概要を述べる。この記載に際し、記述ラベルは「」、小グループとして〈〉、中グループは《》、大グループは【】で括り、グループ名のみゴチック体で表記する。

① 【哲学的悩み】

中グループは同名の《哲学的悩み》のみであった。その下の小グループでは、〈障害とはなにか〉〈療育とはなにか〉の2グループが見出された。

日々の療育の中での困難感、困っていることというよりも、“自問自答”や“答えが出ない”といった記述からも見て取れるように、療育者自身が悩みを抱えていることが示された。しかも、〈障害とはなにか〉〈療育とはなにか〉といった、答えがありそうでない悩みであることから、【哲学的悩み】とネーミングされた。

② 【自分問題】

中グループは同名の《自分問題》のみであった。その下の小グループでは、〈子どもとの関わりの中で生まれるネガティブ心性〉〈自分の関わり方の見つめ直し〉〈自己の見つめ直し〉の3グループが見出された。

他者や同僚から指摘を受けたりするのではなく、自分自身が抱える不安や悩み、あるいは自分自身の特性に対する言及が共通していたことから、【自分問題】とネーミングされた。

③ 【子どもとの関わりに対して困っていること】

中グループは《障害特性にかかわらない子どもの関わり方の難しさ》と《障害特性を持つ子どもへの関わり方の難しさ》の2グループが見出された。

前者の《障害特性にかかわらない子どもの関わり方の難しさ》の小グループとして、同名の《障害特性にかかわらない子どもの関わり方の難しさ》のみであった。後者の《障害特性を持つ子どもへの関わり方の難しさ》の小グループとして、《学習支援にまつわる悩み》、《指示が入りにくい子どもへの対応の難しさ》、《特性（その他）を持つ子どもへの対応の難しさ》、《切り替えが難しい子どもへの対応にまつわる悩み》、《情緒面への対応の難しさ》、《言語にまつわる悩み》、《乱暴な子どもへの対応の難しさ》の7グループが見出された。

学習面、情緒面、言語面などの違いはあるものの、目の前の子どもとどう関わるのか、どう関わればよいのかについて悩み、困難感を抱えている様子が特徴的であったことから、【子どもとの関わりに対して困っていること】とネーミングされた。

④ 【専門性の不足】

中グループは同名の《専門性の不足》のみであった。その下の小グループでは、《専門知識の不足》《スキルの不足》《レパートリーの少なさ》《経験の不足》の4グループが見出された。

療育支援を行なううえで、専門的なスキルやレパートリーが多いほうが役に立つ。それを培っていくのは、療育経験であることは確かなことである。さらに言えば、そうしたスキルや経験の基礎を支えるのが専門的な知識である。これらに共通している概念は専門性である。その専門性が自分にはない、不足している、ゆえに療育が上手くいかないといった悩み、困難感を抱えていることが特徴的なことから【専門性の不足】とネーミングされた。

⑤ 【療育の実施で困っていること・悩んでいること】

中グループは、《実施した療育の妥当性への悩み・不安》、《教材作りの難しさ》、《療育を組み立てる難しさ》の3グループが見出された。

最初の《実施した療育の妥当性への悩み・不

安》の小グループとして、同名の《実施した療育の妥当性への悩み・不安》のみであった。次の《教材作りの難しさ》の小グループも、同名の《教材作りの難しさ》のみであった。最後の《療育を組み立てる難しさ》の小グループとして、《目標設定》《プログラム・課題を考えること》《子どもの状態像の把握・見立て・見極め》の3グループが見出された。

このグループの共通性として、療育実施上の具体的な事態に対する悩みや困りごとが見出された。先の③【子どもとの関わりに対して困っていること】も、療育を実施するうえで困難を感じている事態であったが、あくまで子どもとの関わりについて言及されたグループであった。一方こちらのグループは、どのような目標・計画を立て、どのような教材を使い、どのように実施するのかに対する悩みや困りごとに言及されていた。こうしたことから【療育の実施で困っていること・悩んでいること】とネーミングされた。

⑥ 【療育者を取り巻く環境の問題】

中グループは、《制度・体制の問題》、《物的環境の問題》、《人的環境の問題》、《労働環境の問題》、《外部機関との連携の難しさ》の5グループが見出された。

最初の《制度・体制の問題》の小グループとして、《制度上の悩み》《集団療育の中で子どもに能力差があることについて》《時間割の問題》《事業所の方針》《情報共有に関する悩み》の5グループが見出された。

2番目の《物的環境の問題》の小グループとして、《建物の構造の問題》《教材の不足》の、2グループが見出された。

3番目の《人的環境の問題》の小グループとして、《専門性を持った人材の不足》《療育について意見をすり合わせることの難しさ》の、2グループが見出された。

4番目の《労働環境の問題》の小グループとして、《業務量の多さ》、《人員不足》、《自分の働き方》、《職場内の人間関係に関する悩み》の、4グ

表2 KJ法にもとづく分析結果

(カッコ内はラベル数)

【大グループ】	《中グループ》	〈小グループ〉	ラベル (抜粋)
【哲学的悩み】(11)	《哲学的悩み》(11)	〈障害とは何か〉(3)	日頃から、発達障がいとはなにかについて考えていますが、自分の中で答えが出ません
		〈療育とは何か〉(8)	その子の発達をどこまで手助け出来ているのか？ これでいいのか？ と日々考えてしまう
【自分問題】(14)	《自分問題》(14)	〈子どもとの関わりの中で生まれるネガティブ心性〉(7)	子どもから殴る蹴るなどの行為を受けることが苦しいです
		〈自分の関わり方の見つけ直し〉(2)	子供の特性を受け入れることは大切だと思うが、社会に出て通用しないこともあると思っている。そのため、厳しすぎるかなあと思うことがある
		〈自己の見つけ直し〉(5)	自分の中の『～せねばならない』という頭の固さが支援の邪魔になることがある
【子どもとの関わりに対して困っていること】(62)	《障害特性にかかわらない子どもの関わり方の難しさ》(17)	〈障害特性にかかわらない子どもの関わり方の難しさ〉(17)	認めるところと、注意するところの境界線
		《障害特性を持つ子どもへの関わり方の難しさ》(45)	〈学習支援にまつわる悩み〉(7)
	《障害特性を持つ子どもへの関わり方の難しさ》(45)	〈指示が入りにくい子どもへの対応の難しさ〉(7)	指示が入りづらい児童へのアプローチが難しい
		〈特性(その他)を持つ子どもへの対応の難しさ〉(7)	障害特性による心ない言葉の言い合いからの利用者同士のトラブル
		〈切り替えが難しい子どもへの対応にまつわる悩み〉(3)	子どもがプログラム以外のことに興味をもちプログラムへの切り替えがなかなかできないとき
		〈情緒面への対応の難しさ〉(11)	子どもが癇癪を起こしたときのクールダウンのさせ方
		〈言語にまつわる悩み〉(6)	言語を用いたコミュニケーションが困難な子どもとの関わり
		〈乱暴な子どもへの対応の難しさ〉(4)	破壊行動をする子への対応
【専門性の不足】(15)	《専門性の不足》(15)	〈専門知識の不足〉(7)	専門的知識が乏しい事
		〈スキルの不足〉(3)	自身の能力不足(子どもの見立て、支援内容、方向性など)
		〈レポトリの少なさ〉(4)	引き出しが少なく、その子にあった支援教材を考えるのに苦労する
		〈経験の不足〉(1)	実際の支援を見る機会が少なく(個別支援)、自身も子供たちにはずっと関わっているが、障害のある子供に接する機会・経験が少ないので、支援する方法が分からないとき
【療育の実施で困っていること・悩んでいること】(42)	《実施した療育の妥当性への悩み・不安》(11)	〈実施した療育の妥当性への悩み・不安〉(11)	今やっている内容がその児童にとってベストの方法なのか悩んでいる
		《教材作りの難しさ》(4)	〈教材作りの難しさ〉(4)
	《療育を組み立てる難しさ》(27)	〈目標設定〉(1)	ダウン症および知的障害児の支援の最終目標の設定がとても難しいと思うこと
		〈プログラム、課題を考えること〉(15)	どの段階でどんな療育をすることがベストなのか常に迷っています
		〈子どもの状態像の把握・見立て・見極め〉(11)	その子の特性を見立て判断すること。どのようなやり方や方法があっているのかなど

【大グループ】	《中グループ》	〈小グループ〉	ラベル (抜粋)
【療育者を取り巻く環境の問題】 (35)	《制度・体制の問題》 (7)	〈制度上の悩み〉 (1)	小さな子から中学生まで、重度の子から中学生の学習支援まで、個人で担当する療育の幅が広すぎる
		〈集団療育の中で子どもに能力差があることについて〉 (1)	集団療育のときの能力差
		〈時間割の問題〉 (3)	大きな声を出す、動き回る児童がいる時間帯の他児童への配慮
		〈事業所の方針〉 (1)	長期間利用されている方ほど、療育<学習のような状況になりがち
		〈情報共有に関する悩み〉 (1)	他の教室で有効に使われている教材などの情報共有がしたい
	《物的環境の問題》 (7)	〈建物の構造の問題〉 (3)	支援中にインターホンが鳴ると、支援を抜け出して扉を開けに行く必要がある (事務所と階数が異なるため)
		〈教材の不足〉 (4)	教材・設備が限定的であること
	《人的環境の問題》 (8)	〈専門性を持った人材の不足〉 (3)	同じ事業所の人間でも、療育を専門に長期にわたり行っているものがないため、相談しても不安が常に付きまとう
		〈療育について意見をすり合わせることの難しさ〉 (5)	療育支援を行なう上で、「狙い」について意見の統一性がわかれてしまうとき
	《労働環境の問題》 (9)	〈業務量の多さ〉 (3)	支援の後片付けや整理と、次の計画と準備に必要な時間がとれない
		〈人員不足〉 (1)	入れ替わりの時間に職員以上の人数の子どもがいることが多いが、職員が不足し、子どもを一人で待たせてしまうことが少なくない
		〈自分の働き方〉 (2)	時間的にも余裕がない為、勉強する時間も限られている。療育がマンネリ化していても、余裕のなさから、そこから抜け出しにくい
		〈職場内の人間関係に関する悩み〉 (3)	職員同士の意思疎通の難しさ
《外部機関との連携の難しさ》 (4)	〈外部機関との連携の難しさ〉 (4)	保育園・幼稚園、学校との連携	
【保護者に対して困っていること】 (25)	《コミュニケーション、関係づくりの難しさ》 (4)	〈保護者との関係づくりの悩み〉 (3)	保護者とのコミュニケーションを取る機会が限られているため、今後の展開などを含めた支援を進めていく為の相談が十分にできない
		〈外国籍の保護者とのコミュニケーションの難しさ〉 (1)	ブラジル人との意思疎通が困難。日本人の意見を聞いてくれない。こちらが困っていても無視される
	《保護者の認識のずれに対する難しさ》 (13)	〈保護者と療育者との認識のズレ〉 (8)	療育を必要として来所される保護者さんのなかには、行動面や情緒面での困りがあっても学習を主訴にあげるかたが多いこと
		〈保護者の認識と子どものニーズとのズレ〉 (5)	親御さんの要求と子供の現状の発達 (子供のニーズ) に差があるときに、戸惑い覚えます
	《保護者 (家庭) の支援・対応の難しさ》 (8)	〈保護者への対応の難しさ〉 (2)	保護者の対応
		〈保護者からの家庭内に関する相談について〉 (2)	成長発達の違いから「なんでこんな事もできないの？」と歳下から言われてしまい傷ついている子や、長男が弟に依存傾向があり、遊びに行く時やお風呂、寝る時ずっと一緒にいないと機嫌が悪くなる等の兄弟、姉妹関係の相談についての対応
		〈家族を含めて支援していくことの難しさ〉 (4)	子ども本人だけでなく家族も含めて考えていくことについて

ループが見出された。

5番目の《外部機関との連携の難しさ》の小グループとして、同名の〈外部機関との連携の難しさ〉のみであった。

児童発達支援は児童福祉法に基づく事業であるので、制度に守られている面がある一方、制約されることや限界があることは想像に難くない。また、組織である事業所に所属して働くうえでは、事業所の方針などに制約感を持つことも少なくない。この大グループは、療育を行なううえでの様々な環境についての困難感に言及されていることから、【療育者を取り巻く環境の問題】とネーミングされた。

⑦ 【保護者に対して困っていること】

中グループは、《コミュニケーション、関係づくりの難しさ》《保護者の認識のずれに対する難しさ》《保護者（家庭）の支援・対応の難しさ》の3グループが見出された。

最初の《コミュニケーション、関係づくりの難しさ》の小グループとして、〈保護者との関係づくりの悩み〉〈外国籍の保護者とのコミュニケーションの難しさ〉の2グループが見出された。

次の《保護者の認識のずれに対する難しさ》の小グループとして、〈保護者と療育者との認識のズレ〉〈保護者の認識と子どものニーズとのズレ〉

の2グループが見出された。

最後の《保護者（家庭）の支援・対応の難しさ》の小グループとして、〈保護者への対応の難しさ〉〈保護者からの家庭内に関する相談について〉〈家族を含めて支援していくことの難しさ〉の3グループが見出された。

現在の児童発達支援では、子どもの療育支援だけではなく、保護者への支援にも期待が大きい。また、子どものよりよい療育を実施するうえでも、保護者との緊密なコミュニケーションは必要である。ここでは、こうした保護者との関わりについての困難感に言及されていることから、【保護者に対して困っていること】とネーミングされた。

(3) 抽出された困難感の図解化

212枚のラベルから最終的に抽出された7つの大グループは、すなわち本論で明らかにされた療育者の困難感である。以下、7つの大グループを、7の困難感として表記をしていく。

次に、それら7つの困難感の構造および関係性について、空間配置図を図1に示す。

図1に示したように、7つの困難感がさらに3つの枠で囲まれ、3層構造として配置されている。第1層の表層（【子どもとの関わりに対して困っ

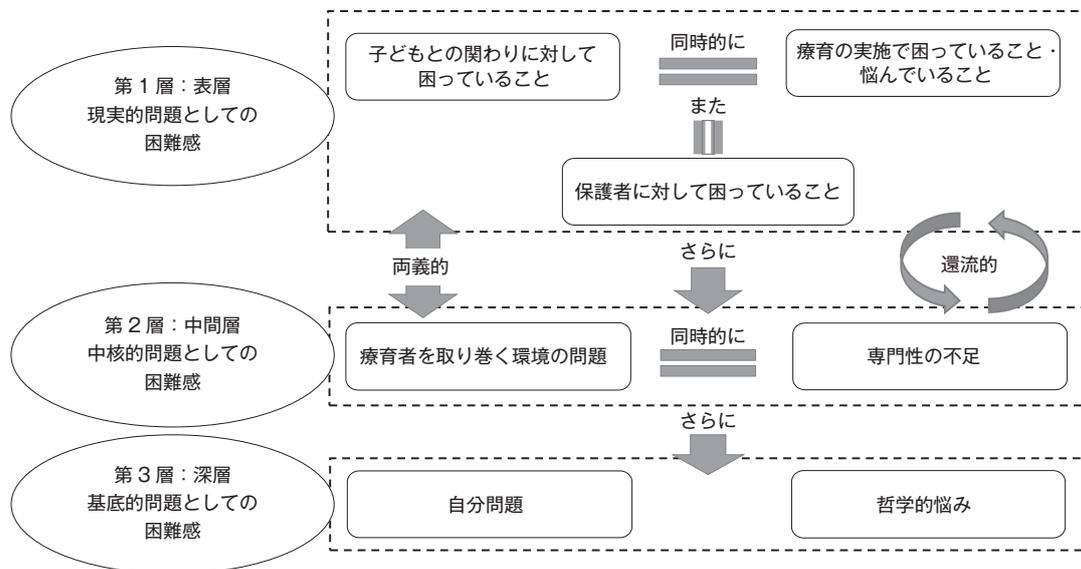


図1 療育者の困難感の構造および関係性を表す空間配置図

ていること】**【療育の実施で困っていること・悩んでいること】**)は現実的問題としての困難感、第2層の中間層(**【療育者を取り巻く環境の問題】****【専門性の不足】**)は中核的問題としての困難感、第3層の深層(**【自分問題】****【哲学的悩み】**)は基底的問題としての困難感である。

療育者は日々の療育で子どもと関わる中で、**【子どもとの関わりに対して困っていること】**は常に意識されやすい状態にある。それは療育への振り返りとなり、**【療育の実施で困っていること・悩んでいること】**を同時的に意識する状態ともなる。また、近年での保護者支援の役割期待により保護者との関わりが増え、**【保護者に対して困っていること】**も強く意識されるようになってきている。これらはすべて、日々の療育に直接的に結びつく現実的問題としての困難感であり、意識されやすい表層に位置している。

現実的問題としての困難感を鎮めるべく、その問題の解決に向かうプロセスの中で、さらに本質に近い中核的問題としての困難感に繋がっていく。まず自分の**【専門性の不足】**について否応なく直面する事態であると同時に、今置かれている労働環境にも目が向き、**【療育者を取り巻く環境の問題】**も意識されるようになる。この中核的問題としての困難感、普段は意識に上ることは少ないが、第1層の現実的問題としての困難感により解発され、意識されるようになることから、第2層の中間層に位置している。

これら第1層と第2層の困難感の関係は、両義的、還流的関係にある。なぜなら出発点は第1層の現実的問題としての困難感であるがゆえ、第2層の困難感に対処することは、結果として第1層の困難感の解決へと繋がっているからである。

第1層の現実的問題としての困難感から始まり、第2層の中核的問題として困難感を持ちつつ、しかし思うような解決に至らなければ、さらに深い困難感を抱えるまでに及ぶ。それが第3層の深層に位置する基底的問題としての困難感である。なぜ基底的呢か。それは療育者自身が療育

者という枠を超え、一人の人間として**【自分問題】**や**【哲学的悩み】**を抱えるからである。いわば人間として抱える困難感が、この第3層の深層に位置している。

4. 考 察

本研究は、療育者の困難感を明らかにするため、日々の療育にあたる中での困難感について6項目を提示し、それぞれについて自由記述式で回答を得た。先述したように本論では、その6項目のうち「子どもの療育をする上で困難に感じていること」についてのみ取り上げることとしている。これを踏まえ本項では、療育者の困難感とはなにか、困難感の本態はなにかという視点で考察を進める。

本論の結果で示したように、療育者の困難感、3層構造として考えられることが明らかになった。この3層それぞれの元ラベル数を見ると、第1層は129枚、第2層は50枚、第3層は25枚であった。表層から深層への推移するごとにラベル数が少なくなっていった。このことは、多くの療育者が抱えている困難感、第1層であり、第3層はごく少数だと言い換えることが可能である。

確かに、分析結果で示されたように、第1層はより現実に近いところで抱える困難感が集まっている。それゆえラベル数も多くなるが、それがすなわち困難感の本態を表しているとは言い難い。なぜなら、第1層と第2層とはコインの裏表の関係であり、どちらが重要であるかではなく、どちらも同じく重要であると考えられるからである。さらに言えば、第3層は深層に横たわる心性であり、療育者としての一人の「私」が自分をふり返り、療育理念をふり返るという意味でも、やはり同じく重要な心性であると考えられる。つまり、第1層から第3層までの7つの困難感、独立しているものではなく、すべてが複合的に入り組んでいる、いわばコンプレックスの状態であり、その総体が療育者の困難感そのものだと考えることができよう。

そのように考えると、一つのタームが療育者の困難感の本態を表すものとして浮かび上がってくる。それは「混乱」である。

「現在は多種多様な障害のある子どもの発達支援に加え、家族支援や地域支援等の業務が拡大しており、現場の支援者の混乱も大きい」（藤田、2018）との指摘がある。この指摘は、第一筆者がスーパーバイザーとして現場に赴き、スタッフの面談をしていても実感することができる。『日本語大辞典』（講談社）によれば、混乱とは「入りみだれて、秩序がなくなること」とある。分析結果で示した図1は3層構造に分かれ、一見すると秩序があるように見えるが、同じ層の中でも“同時に”抱えたり、異なる層が“両義的”“還流的”であったりと、入りみだれて秩序がない状態であると言えよう。

では、なぜこのような「混乱」が生じることになるのかについて、層を分けたうえで考察を試みたい。まず第1層：表層の「混乱」について考察する。この第1層は、療育者が日々の療育で子どもと関わる中で、【子どもとの関わりに対して困っていること】、【療育の実施で困っていること・悩んでいること】を同時に抱え、さらに【保護者に対して困っていること】も強く意識するようになっていくことを示していた。

現在の児童発達支援の役割は多岐にわたっているものの、療育としての本態的な役割は、発達障害児の発達支援であることは間違いのないであろう。第一筆者がスーパーバイザーとして関わる中でも、そのような意識をしっかりと持った療育者が多い。障害児を支援するという強い思いと願いを持った療育者である。それゆえに、とくに担当児の発達や行動に過敏になることもある。それが子どもとの関わりや療育の実施に対する困難感を生むと考える。その二つを同時に抱えるだけでも混乱することは想像に難くないが、そこに保護者への支援についての困難感が加わってくる。療育者の役割として保護者支援は位置付けられているのであるが、先ほど述べたように療育の本態的

な役割は子どもの発達支援だと考える療育者は多い。え、それとはまったく異なるスタイルの保護者支援を苦手としている療育者も多い。現在の療育者は、日々の療育の中でこれら3つの困難感を同時に抱えることになり、そこに「混乱」が生じるものと考えられる。

次に第2層：中間層の「混乱」について考察する。この第2層は、第1層での現実的な問題に直面することで、自らの【専門性の不足】や【療育者を取り巻く環境の問題】という新たな困難感を抱え得ることを示していた。

【専門性の不足】はあくまで自分自身への内省であるが、【療育者を取り巻く環境の問題】は外に向かっていく心性である。いわば相反する心性であるが、療育者はこれらについても同時に抱えている。それは、「ルビンの盃」に代表される多義図形のような心性である。多義図形は紛れもなく唯一無二の図柄であるが、見る者によって異なる図柄に見えるというものである。それは、一つの出来事であっても、立場が異なる者が見れば事実は異なることを意味している。

療育者として【子どもとの関わりに対して困っていること】という出来事があった時、どうして上手くいかないのか、どうすればいいのかを考える。考えた末に出た答えが、その療育者にとっての事実である。しかし、カンファレンスやスーパーバイズのように、他者がその出来事を見ると異なる事実が浮かび上がってくる。これを繰り返していくことで、療育者自身が、一つの出来事からいくつもの事実を探り出せるようになる。これは療育の質の向上にとって不可欠な繰り返しである。しかし、それが整理されたり統合されたりし得ない時、それは秩序が乱れた混乱状態になると考えられる。

続いて第3層：深層の「混乱」について考察する。この第3層は、療育を実施するうえでの困難感を何とかしようとする中において、その療育上の困難感を【自分問題】として置き換えたり、【哲学的悩み】をも抱えたりすることを示していた。

自分とは何か、子どもとは何か、療育とは何か、自分は療育の仕事に向いているのか等々、療育者としてというよりも人間としての悩みである。目の前の療育に対する困難感を、いかにして軽くしていくのか、いかにすれば解決するのかを考えるのは、療育者ではなく、一人の人間としての「私」である。自己や自我、自分と呼べる「私」の意識において、困難感をどうにかしようとする。しかし、「～とはなにか」といった問いに対する答えはすぐに見つかるものではない。深く思索すればするほど、ますます混乱を生じさせることは想像に難くない。

このように、各層において「混乱」が生じるであろうことを考察したが、最大の「混乱」はこれらの層が複合的に総体となっている点であろう。図1で示したように、第1層と第2層は両義的、還流的な関係、コインの裏表の関係にある。出来事は一つにもかかわらず、色々な視点が重なると色々な事実が浮かび上がってくる。先ほども述べたような多義図形の様相と同じである。我々は情報を整理し、統合し、秩序立てていくことができる。それは思考や認知だけではなく情緒も含んだ、心の働きである。色々な事実が浮かび上がったり、他から提示されたりしたとしても、しっかりと心のかんじによって混乱を鎮め、困難感をも鎮めることになろう。この意味においても、第3層が基底となることは確かなことであろう。すなわち、規定となる第3層で混乱が生じれば、それはすべてにおいての混乱を招くことにもなり得る。逆に第3層での混乱が鎮まり、あるいはなければ、第1層や第2層における混乱も鎮まり、困難感も鎮まっていくものと考えられよう。

5. まとめと今後の課題

本論の調査を分析した結果、7つの療育者の困難感を抽出した。そのどれもが困難感としてあるが、決して独立しているものではない。療育者の困難感とは、そうした各々の困難感が複合的にまとまり総体となっている心性であることが示唆さ

れた。また、療育者の困難感の本態が「混乱」という心性にあることを明らかにした。

既に述べてきたように、本稿での分析と考察は、一連の共同研究の一部である。他の自由記述項目のデータについても、その整理と分析は終わっている。これらについても順次、論文として発表していくこととなる。さらには、療育者の困難感を測るスケールの作成に繋げるべく、質問紙項目を立てプレ調査を実施していく予定である。

本論では、療育の質という点にまで言及することはできなかったが、何のための研究かと言えば、療育者の困難感を明らかにすることを通して、療育の質を高めることに寄与することである。今後の一連の研究を通して、療育の質とは何かについても明らかにしていきたい。

引用・参考文献

- 藤田久美 2017 地域を基盤とした子育て支援システムにおける児童発達支援に携わる支援者の役割——発達障害の早期支援に着目して—— 地域ケアリング 19 (9) pp. 86-88
- 古川和稔 2010 介護福祉士の早期離職に関する質的研究 自立支援介護学 3(2) pp. 78-85
- 保正友子・杉山明伸・橋本博之・大口達也 2019 医療ソーシャルワーカーの離職意向に影響を及ぼす要因 日本福祉大学社会福祉論集 140 pp. 1-20
- 石井優香・石橋みゆき・正木治恵 2018 一般病棟における看護師の感情に着目した認知症患者のとらえ方 千葉看護誌 24(1) pp. 33-42
- 板川知央 2018 放課後等デイサービス職員が持つ支援の困り感について——勤務経験者へのインタビューの分析から—— 福祉心理学研究 15(1) pp. 57-62
- 板川知央・横畑泰希 2018 療育者の困難感に関する予備的検討——質問紙における自由記述の分析から—— 日本福祉心理学会第16回大会発表論文集 p. 40
- 加藤正仁 2018 わが国の児童発達支援の動向 公衆衛生 82(5) pp. 370-376
- 厚生労働省 2013 労働市場分析レポート第21号——福祉分野の雇用動向について https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/roudou_report/dl/20131029_01.pdf (2019年2月28日閲覧)
- 黒沢麻美・佐藤直由 2017 介護職員の生活満足感と職務満足感の検討——Y市とS市のアンケート調査の結果を踏まえて—— 保健福祉学研究 15 pp. 11-20

梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明監修
1989 日本語大辞典 講談社
八木孝憲 2018 乳幼児療育の現況と課題に関する調査
研究——事業所職員と保護者への質問紙調査から——

発達障害支援システム学研究 17(1) pp.29-41

(よこはた たいき) 東京未来大学
(いたがわ ともひろ) NPO 法人発達わんぱく会